

---

# 総論

---

篠原 徹

## 1 環境と民俗誌

アジア地域の環境は、フローラやファウナといった生物的な世界はいうにおよばず、気候や気象あるいは地形や地質においてもきわめて多様である。そしてこの環境の多様性に対応しながら各地域に住む人びとの生活もまた多様である。したがって、それぞれの地域に固有な歴史と現在のなかにある論理や実践をみいだすことによってしか、アジア地域の近未来的な環境と人のありうべき関係は展望できないであろう。とくにこの基幹共同研究A班が一貫してテーマとして掲げてきた「資源としての自然と人間との関係」ということに着目するなら、それぞれの地域に固有な歴史と現在のなかにある論理と実践は、エスノ・サイエンスという領域に包含される。ここでいうエスノ・サイエンスとは寺嶋秀明が述べている「エスノ・サイエンスは、日々、自然と密接に接触しながら観察と試行を繰り返し、相互の情報交換をおこない、よりよき実践と価値を求めて生きていく人びとの暮らしの中にある。文化の中に埋め込まれた、そういった経験の束そのものがエスノ・サイエンスなのである<sup>(1)</sup>」のことを指している。この論集はそれぞれの地域の実践と価値に基づくエスノ・サイエンスを含むモノグラフを中心に編まれている。

もちろんエスノ・サイエンスは、サイエンスという語がついているからといって純粋な科学という意味ではない。それは寺嶋のエスノ・サイエンスの用法に、「経験の束」という言葉が入っていることでも明らかである。21世紀は環境の世紀になるであろうと多くの人が予想している。これほど人と自然の関係がかつて問われたことはない。その根源的な問いとは「科学」そのものへの異議申し立てである。科学は、体系的で、法則的で、予測可能性を追求する知の体系であるとすれば、環境問題はその出発点においてすでに科学の範疇から逸脱している。環境問題に対して、矛盾なき知の体系を構築することはありえないからである。人びとの生業の営みそのものが環境破壊と同時進行してきたのが人類史そのものであったからである。自然と人の関係をこの側面から照射すれば、矛盾ある関係性のなかで、せいぜいよりよい関係とは何かを問うことでしかない。

それでは、アジア地域というような広大な環境のなかで点のような存在であるそれぞれの地域の人びとの自然と暮らしの関係に関する精緻なモノグラフは意味があるのだろうか。筆者自身もこの問題についてはすでに言及したことがある。そこでは「私たちの多くが〈最後に自然とつきあう人びと〉であり、〈最初に自然とつきあう人びと〉とは、世界中で自然を資源として利用し、我々に農作物や魚や肉や調味料や香辛料を提供している人びとのことである。ある緯度と経度の環境に住む人びとの自然に関する精緻な経験は、国家の枠組みを越えて、この地球という環境と人間との関係

を考える素材とならなければならない<sup>(2)</sup>」と述べた。歴史や現在の中で自然と対峙して生活の糧をうる人びとの実践は、確かに共同体や地域社会あるいは国家という枠組みのなかで大きな制約も受ける。また、人間が作りあげる生産・流通・消費という経済のシステムによって、地域の生活世界が、点から線そして面に拡大してきた。現在、世界中に稠密に存在する国民国家の枠を超えて経済のグローバリズムが浸透している。この事例をあげることは枚挙にいとまがないが、筆者もひとつの点からこれについて言及したことがある<sup>(3)</sup>。

現在の国民国家や経済のグローバリズムに対する対抗軸を構築するため、それこそ点でしかない地域の自然と人間に関する精緻なモノグラフとはどのような素材なのであろうか。人と環境の相互作用としての人類史という観点では、つまるところ「資源としての自然と人間の関係」に要約されるように、人間が対峙するのは自然だからである。資源の対象である自然とはほとんど生物的世界のことを指している。そしてこの地球上に展開する生物的世界をかりにすべて農耕地に変えて擬似的な自然環境を作りあげても、この生物的世界は国家の制度や経済のシステムで制御できる相手ではないことはいまでもないことである。「大なる自然の運行」はすぐさま人間の世界に反逆してくるであろう。

鳥越皓之は柳田国男の環境論を論ずるなかで柳田の「大なる自然の運行」と「小なる自然の運行」を対比させ、人が自然に関与できるのは後者であることを見抜いていたのは卓見であると評価している<sup>(4)</sup>。鳥越は柳田の「小なる自然の運行」に対する人の営為の核心として「村を美しくする計画など、というものは有り得ないので、或は良い村が自然に美しくなっていくのでは無いかと思われる」という言葉をとりあげている。

そうだとすれば、点のような存在でしかない各地域の自然に対峙して生活する人びとの営為は、人類史のなかの壮大な実験とみなさなければならない。そしてそれは現在も続いている営為なのであり、国家の制度や経済のシステムという外部からやってくる試練に対して「小なる自然の運行」に人がどのように関与し自然を改変すべきなのか果敢に挑戦している姿としてモノグラフを捉えるべきであろう。その果敢な挑戦のなかにしか人と環境のあるべき未来像はないのではないか。各地域の自然と対峙する人びとの営為を、ある緯度と経度に住む人びとの自然誌として描き、このなかに国家の制度や経済のシステムを超越する姿を創造していく必要がある。現在もっとも大きな趨勢となっている国民国家が回収できない「民俗」とは、こうした生物的自然に対峙して生きている人びとの生活世界にしか存在しない。編者が、地域の自然に対峙する極微の生活世界のモノグラフに固執する理由はここにある。

## 2 生活・認識・歴史からのアプローチ

編者が基幹共同研究「アジア地域の環境とその民族的プラクシス」を終えて考えてきた総論的な印象を述べた。そこで、もう少し具体的な共同研究の内容と今回編集されている論文について言及したい。共同研究はメンバーがそれぞれ研究をおこなっている地域の環境利用の実践について発表をおこない、それにもとづきさまざまな分野の人とディスカッションをおこなうという形式をとってきた。この共同研究のもっとも大きな特質は、共通した問題意識つまり「アジア地域における環境とその民族的プラクシス」という「地域の自然に対峙する極微の生活世界」にはたしてアジアと

括れるような通底した普遍的な民俗論理（たとえば共有地利用の慣行や所有観）があるのか、あるいはそれは地域ごとの個別の民俗論理があるのかといったことを、さまざまな分野から討議したことにある。参加した共同研究者は多様であり、環境や自然に関心をもつ民俗学・歴史学・環境社会学・森林社会学・環境倫理学・生態人類学・文化人類学・環境考古学・地理学など多岐にわたる。提出された11編は、いずれも環境問題に関わる重要な論述をおこなっている。

11編の論文は、共同研究のテーマ「アジア地域における環境とその民族的プラクシス」に対してさまざまなアプローチを試みている。それはおよそ3つの方向からのアプローチとして分類できるであろう。1つは、環境と生活世界のかかわりかたを中心に論述されたものである。西谷大の「野生と栽培を結ぶ開かれた扉——焼畑周辺をめぐる植物利用からみた栽培化に関する一考察——」、関礼子の「生業活動と『かかわりの自然空間』——曖昧で不安定な河川空間をめぐる——」、竹川大介の「実践知識を背景とした環境への権利——宮古島潜水漁業者と観光ダイバーの確執と自然観——」、そして卯田宗平の「『両テンビン』世帯の人々——とりまく資源に連関する複合性への志向——」の4つの論文は「環境と生活」としてまとめた。

2つめは、地域やある社会の人びとが、自然をどのように認識しているかあるいは分類しているかというアプローチである。安室知の「民俗分類の思考——魚の成長段階名とドメスティケーション——」、野地恒有の「日本と中国における金魚観賞とその選評基準」、中野泰の「シロバエ考——底延縄漁師の漁場認識とフォーク・モデルの意義——」、そして菱川晶子の「図像化された動物——オオカミの表象と形態認識——」の4編を「環境と認識」として収録した。

3つめは、人びとが生業によって環境に働きかける営為の長い時間的な経緯とそれによる環境の変化の時間的なダイナミズムを考えるアプローチである。小椋純一の「明治期における京都府内の植生景観変化の背景」、岡恵介の「北上山地山村における森林利用の諸相」、菅豊による「『水辺』の開拓史——近世中期における堀り上げ水田工法の発展とその要因——」の3編は「環境と歴史」として分類した。「生活」「認識」「歴史」の3つのアプローチはいずれも本課題においてはなくてはならない切り口であるが、この3つのアプローチがまた相互に連関しているはずであり、個別の論文のなかでもそのことは言及されている。

西谷論文は、中国海南島の山間部に住むリー族社会の植物利用をあつかったものである。リー族文化は現在大きく変容しているが、かつての生業は焼畑・水田および背後の山における狩猟採集と複合的な生業を営んでいた。現在もこの伝統はとくに焼畑（常畑化していて斜面畑といったほうがいいが）で継続している。西谷は、焼畑の技術のなかでも、とくに焼畑周辺つまり放棄された焼畑や休耕中の焼畑に着目して、このなかで半栽培といえる植物のありかたを検討している。ここにさまざまな植物が生き、移植・保護・半栽培・忌避などのさまざまな人間の関与と関係していることを示し、これらの人間行動のなかにドメスティケーションの過程を推察している。きわめて重要な指摘であると考えられる。

関礼子の論文は、阿賀野川流域のひとつである新潟県北蒲原郡安田町小松という地域の環境と人との関わり方を論じたものである。とくに阿賀野川という河川空間の利用が、「かかわり」という視点から見ると重層性をもっていて、それが「曖昧な空間」であったことを指摘している。現在、この河川を含む環境がしだいに利用や機能の点で、空間の過剰分化と空間の意味の平板化が進行し

ている。しかし、この「曖昧な空間」ゆえに人と環境の関わりかたの多様性が生まれることをこの論文では指摘している。西谷論文でも焼畑周辺という曖昧な空間が重要であるように、この「曖昧な空間」という指摘は今後環境問題を考える上では重要であろう。

竹川論文は、表題が示すように宮古島潜水漁業者と観光ダイバーの確執と自然観というきわめて現代的な課題をみついている。これは一般的には「海は誰のものか」という環境に対するアクセス権という問題であるが、竹川はこれを近代と伝統あるいは権利意識の相克という表面的なレベルで捉えることに異議を唱える。竹川は「海の権利は、資源に対する実践的知識によって保証される」ゆえに、「海を知っている者こそ海を利用できる」という明快な結論を提出する。現在、盛んに議論されているコモンズ論に一石を投ずる論考である。

卯田宗平の論文は房総半島の海付き村を対象に、その生業戦略の自在性を論じている。大都市・東京という巨大な消費地における流通や消費を視野に入れることによって、ある生業に特化するのではなくむしろさまざまな生業を新たに複合させることによって生活戦略をたてている姿を描いている。この村では「ハマシゴト」といわれる潜水漁業やイセエビ漁に代表される磯根漁と、「オカシゴト」と呼ばれる温暖な気候を利用した花卉栽培を基調にして生産性を最大限に上げる方法を編みだしている。流通や消費という経済のシステムの積極的な利用を生業戦略に取り組みという問題は、現在のアジア地域で起きていて、この論文は示唆的である。

広義の意味で自然をどのように分類し認識しているかという問題意識をもつ論文は3編である。まず安室知の論文は時間軸を昭和初期に設定して、扇状地状沖積地が湧水地をもつという環境特性を基盤に水田養鯉を発達させた長野県佐久平にある桜井を対象に、コイの民俗分類がいかにか水田養鯉という技術を支えているのかに焦点をあてて記述している。興味深いのは、コイの成長段階をあらわす名称が、年齢という時間概念による民俗分類と質量の概念による民俗分類が融合していることである。これは水田養鯉という生業にたずさわる人びとの「運用」によるものであり、本稿の最初のほうで引用した寺嶋のいう「エスノ・サイエンス」に該当することを示している。

野地恒有の論文は、日本と中国における「魚観賞の文化」の比較民俗学的研究であり、金魚の選評基準を素材として日本と中国の「魚観賞の文化」の質的相違をあぶりだす試みである。それは自然観の相違の反映であろうと野地は推測している。同じ金魚という人間が創りだす品種に対して、日本では1品種に完結した抽象化された理想型のもと、金魚の形態は基準への「嵌合」をめざす。観賞の志向は定形への深化を本領とする。対して中国では、多品種を包括した実体に即した等級分類が基準となり、飼育形態は基準外の創出をよしとする。観賞の志向は、多様性の拡大を本領とすることになり、同じ金魚に対する態度が明確に日本と中国では異なることを指摘している。こうした自然観の相違がどれだけ普遍性を獲得できるか興味深い。

中野泰の論文は、近代になって沿岸漁業から遠洋漁業へ展開していった山口県萩市玉江浦の東シナ海でのシロバエ漁つまりアマダイ漁を中心に漁場の探索によっていかに漁場が認識されていったかを克明に論じたものである。沿岸漁業の場合は漁場の認識は伝統的な「ヤマアテ」によって可能であるが、遠洋漁業の場合は、それが使用できないので魚群探知機、ローランが駆使される。ここでも重要なことは、いわゆるエスノ・サイエンスというのは具体的な対象物の観察と試行によって以前のもを変化させたり別のものを付加したりしていく「運用」なのであり、中野の論文もその

動的な姿を描いている。

日本列島からオオカミが消滅して1世紀が経とうとしている。しかし、オオカミは日本人の動物観や自然観に依然として強い影響を与え続けている。その点に着目して菱川晶子は、オオカミに関する伝承と図像資料をもちいてオオカミ観の変遷を説いている。図像資料は、宗教色を帯びた絵画、芸術的な絵画、本草学としての絵画の3つに分類できることを明らかにして、本草学が勃興してくるとそれが受容される過程で宗教色を帯びた絵画や芸術的な絵画にも影響を与えていることを示した。オオカミに限らず、日本列島における人獣交渉史には未解明なことが多く、今後こうした方面での多分野の協業が期待される。

人と環境あるいは自然との関係でもっとも議論しにくい側面は、人為による影響下にある環境の歴史的な変遷であろう。環境史あるいは生態史と呼ばれる領域は人為による影響を定量的に測定する史資料がきわめて乏しいことが大きな原因である。これに果敢にとりくんでいるのが小椋純一の論文である。日本の近世があたかも人と環境の調和のとれたモデルかのごとき言説が横行しているが、小椋は明治期前期から残る行政文書を駆使して、明治以前つまり近世の面影を残す植生がその後どのような植生景観の変化を起こしていったのかを京都を中心に論述している。小椋は「江戸初期以来長年にわたる淀川流域における山地荒廃とそれに伴う砂害の問題に対処するため、明治4年以降に大々的な砂防事業が展開されることになった」といい、「山野への火入れ制限・禁止も砂防と関連があった側面もあるが、それはむしろ森林の保護や拡大を目的とした場合が多かった」と述べ、現在の我々が見る景観と明治初期の景観が異なったものであることを述べている。

このことは岡恵介の論文にも通じる観点である。岡は北上山地の一山村における近代の森林利用の歴史を生業との関係で論じている。この山村の生業そのものが時代によって大きく異なる。岡は「昭和に入ってからこの木炭とパルプ・用材の生産によって、安家地区の国有林は切り尽くされた。通時的にみれば、昭和にこれだけの伐採を可能にした森林の蓄積が出来たのは、安家川下流の三陸海岸に近い地域で言えば、明治から大正にかけて森林の蓄積が進んだおかげだったと考えることも出来る。藩政時代の鉄山経営は、稼働期間は数年から十数年の単位だが、当時としては類を見ない森林消費型の商品生産であった」と述べ、山村の生活のための森林利用が単純な歴史ではないことを主張している。同時にそれは現在の森林環境そのものも人の営為という歴史的な結果であり、森林の歴史的な重層性を指摘している。

最後の菅豊の論文は、日本の各地にあった内水面「水辺」がどのような社会的な要請で開拓されていったのかを論じたものである。こうした水辺とは水田耕作という点からみれば生産性の低い低湿地農耕地帯であり、開拓の歴史は「掘り上げ水田工法」という技術が工学的な適応であると同時に社会的な適応であったことを述べている。つまり、多様な資源を供給する「水辺」の「掘り上げ水田工法」による開拓は、同時に多資源利用をも可能にしたのである。こうした地域では多資源適応としての生業複合がみられるが、それは環境利用の限界性とのせめぎ合いのなかで生きた人びとの歴史の結果である。現代の開発というものがそれぞれの地域で刻んできた開発の歴史とは無関係におこなわれるのは、技術の工学的な適応ではあっても社会的な適応を無視するからであろう。しかし、循環する自然や環境に適合的な技術とは何かということは、今後ますます重要な視点となってくるであろう。

---

11編の論文を環境との関係で「生活」「認識」そして「歴史」の3つに分類しそれぞれの簡単な解題をおこなった。2期6年におよぶ基幹共同研究「日本歴史における環境と人間生活に関する総合研究」はこれで終了することになる。この2期6年におよぶ共同研究はさまざまな成果を生んだけれども、未解決なことも多い。また、環境問題の緊急性により新たなテーマの必要性も要請された。2001年度より新たに基幹共同研究「農耕社会の形成と環境への影響」がはじまり、これはA班「縄文・弥生農耕の問題」、B班「環境利用システムの多様性と生活世界」という2つのプランチによって構成されている。新しく始まった基幹共同研究も「環境」に関わるテーマであり、2期6年で果たせなかったことはこの基幹共同研究に期待したい。

---

#### 註

- 
- (1)——寺嶋秀明「フィールドの科学としてのエスノ・サイエンス」寺嶋秀明・篠原徹編『エスノ・サイエンス』2002年、京都大学学術出版会、p 10。
- (2)——篠原徹「環境の民俗からみた生活技術」『アソシエ・特集〈環境の世紀〉』7号、2001年、御茶の水書房、p 177。
- (3)——篠原徹「生物多様性と連関する生計維持機構の多様性」『アジア・太平洋の環境・開発・文化』日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業・大塚プロジェクト、2001年、東京大学大学院医学研究科人類生態学教室、pp 1-12。
- (4)——鳥越皓之『柳田民俗学のフィロソフィー』2002年、東京大学出版会。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)